

Zoom を利用した遠隔『9マス英会話』の実践

A practice of “3 x 3 table English training” in a remote class on Zoom

内藤 永

北海学園大学

Hisashi Naito

Hokkai-Gakuen University

Abstract

This paper reports on the use of “3x3 table English training” to develop the immediate response skills of students in conversation-related courses in 2020 that were conducted online due to the COVID-19 pandemic. In these online classes, the instructor utilized the Web conference system, Zoom, to monitor groups of students separated into breakout rooms where the instructor uses an iPad to access a shared screen. In this exercise, the instructor provides one student (the communicator) with a prepared digital grid which contain symbols, words, or other illustrations in nine cells. The communicator then describes the contents of the prepared grid to the other students who then illustrate their blank grids based on the communicator’s explanation. Although distance learning required computer skills such as drawing pictures with a mouse and operating Zoom, the students were able to develop their English skills better than in the face-to-face classes held in previous years and were highly motivated to participate in the class.

1. はじめに

2020年度は、地球規模で新型コロナウイルス（COVID-19）の感染が拡大し、突如、全国の大学において遠隔授業が本格的に導入され、「遠隔元年」とも記憶される年となった。文部科学省（2020a）が2020年9月15日に公表した「大学における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果」によると、2020年度は表1. が示す通りに全国の8割の大学・高等専門学校において遠隔授業が取り入れられてきた。

表1. 「大学における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果」文部科学省（2020）

2020年	全面遠隔	併用	全面対面	その他
7月1日時点（N=1,069）	23.8%	60.1%	16.2%	
後期の方針（N=1,060）	0.1%	80.1%	19.3%	0.6%

2020年度後期の方針についても、併用の80.1%のうち、19.0%が「ほとんど遠隔」となって

おり、2020 年度全体では、高等教育機関の 2 割程度において遠隔、6 割において対面と遠隔が併用という形で授業が実施されていたことになる。

文部科学省 (2020b) によれば、今から 5 年前の 2016 (平成 28) 年に高等教育機関において遠隔授業が実施されていたのは、一部の授業で実施されている場合も含めたとしても 26.5%に過ぎない。2020 (令和 2) 年 3 月 24 日に文部科学省高等教育局長名で「令和 2 年度における大学等の開始等について (通知)」(元文科高第 1259 号) が公布され、「感染リスクを軽減する観点から、面接授業に代えて、遠隔授業を行うこと」と通達されたことが契機となり、全国の高等教育機関において一気に遠隔授業が開始されることとなった。標準的な遠隔授業というものが確立されていない状況下で、十分な準備期間もないままに、ある意味、各教師の自助努力に委ねられて遠隔授業は実施された。国立情報学研究所が主催する高等教育機関におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム「教育機関 DX シンポ」(<https://www.nii.ac.jp/event/other/decs/>) など、国内外の実践報告はあるが、遠隔授業における授業設計から教材開発、教授法、授業評価法に至るまでの標準化された遠隔授業モデルは確立しておらず、今後、様々な実践の包括的なレビューが必要だろう。

本稿は、このような新型コロナウイルスが拡大する中で突如遠隔で実施されることとなった著者の勤務大学における英会話クラスの遠隔授業実践報告を行うことを狙いとしている。この遠隔授業では『9 マス英会話』(内藤 (To appear)、石川・山田 (2019)、山田・石川・坂部・内藤 (2021) などを参照) と称する教材を使用した。『9 マス英会話』は、国際展示商談会における学生通訳派遣の中で観察されたレスポンスの遅滞 (柴田 (2015)、内藤 (2015a)、内藤 (2015b)、Naito and Terauchi (2020) を参照)、さらには、英会話のクラスでの沈黙などに着想を得て、ESP 的アプローチで開発されたスピーキング教材である (Bao (2013)、Bygate (1987)、Graves (2019)、Tay (1988)、Tomlinson (2011)、内藤 (To appear) を参照)。この教材は即時レスポンスを向上させることを目的として元々対面を前提とした授業の中で開発されたが、本稿では、この英会話教材を対面授業から遠隔授業に移した実践について取り扱う。そして、遠隔に移行した場合のノウハウと対面授業との違いやメリット、デメリットをレビューすることが主たる目的となる。以下、第 2 章では、この遠隔『9 マス英会話』の実施形態と導入した授業概要について触れ、第 3 章では、遠隔『9 マス英会話』が実際にどのように進められたか、第 4 章では、授業を受けてのアンケート結果を示す。第 5 章では、対面『9 マス英会話』と遠隔『9 マス英会話』の類似点と相違点を明示した上で、遠隔に移行したことで副産物として生まれた効果について述べる。最終章の第 6 章では、遠隔『9 マス英会話』の総括と今後の研究課題について展望して閉じることとする。

2. 遠隔授業の実施形態と必要なデバイス

遠隔授業と呼ばれる授業には、様々な実施形態が存在する。前節で触れた「令和 2 年度に

における大学等の開始等について（通知）」（元文科高第 1259 号）では、遠隔授業活用の留意事項が提示されており、第 3 項の「遠隔授業の活用」の中では、

平成 13 年文部科学省告示第 51 号（大学設置基準第 25 条の規定に基づき、大学が履修させることができる授業について定める件）等に従い行う必要があるところ、同告示第 2 号等の規定に基づき、テレビ会議システム等を利用した同時双方向型の遠隔授業や、オンライン教材を用いたオンデマンド型の遠隔授業を自宅等にいる学生に対して行うことは可能

文部科学省通知・元文科高第 1259 号より

と告知されている。すなわち、日本の高等教育機関における遠隔授業においては、大別して、オンライン教材を用いた「オンデマンド型」とテレビ会議システム等を利用した「同時双方向型」の 2 種類が認められていることになる。「オンデマンド型」の遠隔授業では、教師が講義や解説を録画した上で提示し、学習者が録画を視聴した上で課題に取り組むなどの取り組み行われる。また、「同時双方向型」の遠隔授業では、各社が提供するビデオ会議システムの Zoom や Google Meet、Webex、Microsoft Teams などを使用し、特定の時間に教師と学生がオンライン上で集まり、講義、対話をしながら授業を進める。本論では、米国の Zoom ビデオコミュニケーションズが提供する Web 会議サービスシステム Zoom を使用した同時双方向型の遠隔授業での実践を扱う。

同時双方向型の Zoom を利用した授業にも様々な実施形態が存在する。Zoom には画面を通じて参加者がコミュニケーションを取るだけでなく、チャットや画面共有、ブレイクアウトルームなど様々な機能が搭載されており、それらの機能を使用することで様々な活動を実施することができる。その機能別に授業の実施形態をまとめると以下の表 2. のようになる。表 2. では、下に行くほど使用する機能が増え、操作が複雑になる。

表 2. Zoom を利用した授業形態

	機能	活動イメージ	教師の役割	学習活動
1	基本画面	講義	全体に話す	講義を聞く
2	基本画面	講義＋質疑応答	全体に話す	講義＋マイク質疑
3	基本画面＋チャット	＋質疑応答	全体に話す	＋チャット質疑
	機能	活動イメージ	教師の役割	学習活動
4	基本画面＋画面共有	資料提示	全体に話す	講義を聞く
5	基本画面＋画面共有	ホワイトボード 活動（協働）	全体に話す	講義＋ホワイト ボード書き込み

	機能	活動イメージ	教師の役割	学習活動
6	基本画面＋ブレイクアウトルーム	グループ活動	ブレイクアウトルームの管理	グループ学習
7	基本画面＋ブレイクアウトルーム＋画面共有	グループ活動 (共有)	ブレイクアウトルームの管理	グループ学習
8	基本画面＋ブレイクアウトルーム＋画面共有	グループ活動 (協働)	ブレイクアウトルームの管理	グループ学習
	機能	活動イメージ	教師の役割	学習活動
9	基本画面＋ブレイクアウトルーム＋画面共有＋参加	グループ活動 の見回り指導	各グループ巡回	グループ学習
10	基本画面＋ブレイクアウトルーム＋画面共有＋参加 ＋個別タブレット	グループ活動の 個別指導	全グループ監督	グループ学習

表2. 1.~3.は、Zoom 基本画面のみを用いた遠隔授業で、1.は教師が一方向的に話しをし、2.はマイクを通じて学習者と音声で質疑応答を交え、3.はチャットを通じて学習者と文字で質疑応答を交える実施形態である。表2. 4.~5. は、1.~3. に加えて、Zoom の画面に手元のパソコンにある資料を画面共有したり、ホワイトボードという参加者が書き込みする画面を共有したりする実施形態である。4.のように教師がスライド、写真、映像などの資料を提示しながら実施する形態、5. のようにホワイトボードに学習者に書き込みをさせる実施形態で協働作業が伴うものである。表2. 6.~8. は参加者が少人数のグループに分かれてコミュニケーションできるブレイクアウトルームという機能を使うもので、学習者を任意の人数で任意のグループに振り分けて、グループ活動をする実施形態である。6. は、各ブレイクアウトルームで学習者が話をしながら活動をし、7. は、Zoom の共有機能を使って資料や写真を共有する、8.は、Zoom の共有機能を使って、Microsoft Power Point 資料などを協働で作成する。これらにおける教師の役割は、ブレイクアウトルームを作成して、学習者たちを各ルームに振り分けることになるが、各グループを順次巡回するしかなく、すべてのグループを常時見ることはできない。表2. 9.~10. は、6.~8. のグループ学習が行われるブレイクアウトルームに教師も入って活動を監視し、参加する実施形態である。9. は、ブレイクアウトルームに教師が自ら参加する実施形態である。一つ一つのブレイクアウトルームに順に入ること、巡回監視することができる。10. は、Zoom を開いているパソコンに加えて、iPad のようなタブレットをブレイクアウトルームの数だけ準備し、それぞれのタブレットがブレイクアウトルームに入って、個別の活動を監視しつつ、時には指示を出し、議論に参加する実施形態である。この場合、4名のグループが5つあるとすると、全体を管理するパソコンに加えて、タブレットを5台用意することになり、一人で合計6台分の操作をする

ことになる。

本論の遠隔『9マス英会話』は、これらの実施形態のうち、10.の最も複雑な Zoom の実施形態によって行われた。Zoom を利用した同時双方向型の展開で、ほとんどの学生たちは自宅から受講したが、対面授業で実施される他科目がある場合には大学の WiFi を利用して受講した。

図1. メイン操作用のパソコン1台、ブレイクアウトルーム用の iPad 4 台を使った Zoom 授業



授業時間に用意したデバイスは、教師の側は、Zoom 全体を管理するメイン操作用のパソコン1台、Zoom のブレイクアウトルームを監視するための iPad を4台、さらに、LINE 株式会社が運営・開発する、モバイルメッセージアプリケーション LINE を操作するためのスマートフォンである。iPad を4台揃えたのは、ブレイクアウトルームでグループ学習が行われている時に、4つのグループのそれぞれに iPad 1台ずつ参加し、4つの異なるグループを同時に監視するためである。学生の側は、Zoom でのやりとりをするパソコン、あるいは、タブレット1台、LINE を操作するためのスマートフォンである。学生たちは、全体の指導や指示については、Zoom や LINE で受けることになる。全体への指導や指示について LINE も併用するのは、画面共有をしているときに、Zoom 上での指示はどうしても見逃しやすく、着信音で指示があったことが分かる LINE の方が確認しやすいからである。グループ活動は、4~5名の固定メンバーが Zoom のブレイクアウトルームに入ることによって行われた。

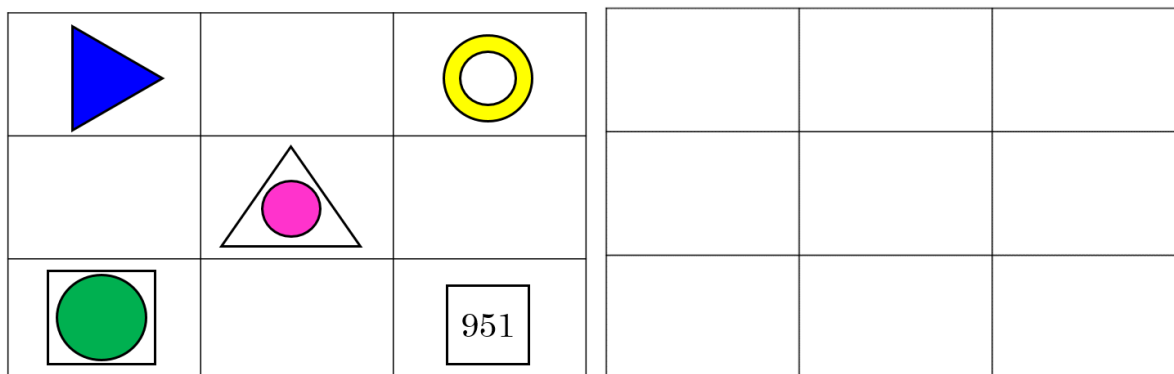
3. 遠隔『9マス英会話』の授業実践

遠隔『9マス英会話』は、著者が勤務する大学において、2020年度の「英語コミュニケーションI」という大学1年生（経済学部、経営学部、法学部、人文学部、工学部の学部横断）を対象とした20名のクラス、「コミュニケーション・ストラテジーA」という大学1年生（経営学部のみ）を対象とした23名のクラス、「ビジネス・コミュニケーション」という大学3年生（経営学部のみ）を対象とした11名のクラス、以上の3つのクラスにおいて、それぞれ週に1回行われる90分の授業の中で30分のみ割いて実施された。『9マス英会話』の教材自体は12レッスンで構成されており、学生たちは、前期・後期の2学期制の授業展開の

うち科目が展開される前期か後期に、30分×12レッスンの演習を行うことになる。

『9マス英会話』は（詳しい説明は、内藤（to appear））、『伝達者』という役割を担う学生が、図2.のようなスライド、すなわち、9マスの表の中に記されたモノ（数字、記号、図形、果物など）を、『記述者』という役割を担う学生に口頭（英語のみ）で伝え、『記述者』の側は、まっさらな9マスの用紙に伝達されたモノを書き留めて『伝達者』が持つスライドを完全に再現することをゴールとした教材である。9マスの中のモノは、数字の桁数を増やしたり、記号（＝、＋、@など）を導入したり、図形（○、△、×など）の数を増やしたり、サイズや方向性を変えたり、色を付けくわえたりしながらレッスンが進むにつれて徐々に複雑化していく。1回のレッスンでは4枚程度の異なるスライドを使用する。1桁の数字からスタートしたスライドは、最終的には食べ物など複雑なモノとなり、それが瞬間的に英語で表現できるように訓練していく教材である。伝達者が伝える内容はスライドに記されているので、伝達者は何を話そうかと考える必要はなく、単純にスライド内のモノをどう英語表現するかを考えながら伝達していく。

図2. 『9マス英会話』で伝達者が使用するスライド（左）と記述者が使用する用紙（右）



Zoom 上で行われる遠隔『9マス英会話』では、学生たちは1グループ4-5名となって、4-5のブレイクアウトルームのいずれかに入っていく。各グループでは、誰か1名が『伝達者』となり、残りのメンバーが『記述者』となる。この役割分担を決めた後、『記述者』たちは、画面共有の『ホワイトボード』立ち上げて、9マスができるようにホワイトボード上に描画機能を使って、線を引き、準備を終える。教師は、すべてのグループにこの9マスが記されたホワイトボードが立ち上げられていることを監視する。

すべてのグループの準備を終えると、教師は『伝達者』たちにスライドを配信することになるが、この配信は、図3.で示されているように、LINEで行われる。『じゃ、行きます！』という教師の合図でスライドを一斉に送信する。

図3. LINE で配信される『9マス英会話』のスライド



『伝達者』たちはスマートフォンでこの LINE メッセージを確認し、このスマートフォンのスライドを見ながら、Zoom のブレイクアウトルームにいる『記述者』に向かって9マスに書かれたモノを順次英語で説明をしていく。『記述者』の役割の学生は、当然のことながら、この LINE に送信されたスライドは見ないで、指示にしたがってホワイトボードの各マスに埋めて行く。

『伝達者』は、例えば、以下のような説明をしていく。「誰が」、「どの位置のマスに」、「何を」描画していくかの指示を出していく。

- 1) Emi, in the top left, we have a word, “Watermelon”, big W and small letters.
- 2) Kenta, in the top center, we have a right direction arrow. It is green.
- 3) Kana, in the top right, we have a price, 1,280 yen. Yen mark, then number 1, colon, two eight zero.

『記述者』が間違っって聞き取ったり、誤解して描画した場合には、『伝達者』は『記述者』に修正依頼を出して、正確に記述するように促す。教師はこの間、iPad を通じてすべてのグループの様子を監視し、日本語が使用されていないか、上手い英語表現がどれほど使われているかを確認することになる。

学生たちはこのようなやりとりを繰り返して9マスを埋め終わると、Zoom のホワイトボードの画面をスマートフォンで撮影して、それを図4. のように LINE 上に提出をする。

図 4. LINE 上に提出される各グループのホワイトボードの画面



この LINE 画面を見ることで、各グループでは、自分たちのグループが早く終えたのか、遅かったのか、9マスの描画は他のグループより正確なのか、細部まで表現されているかなど、他グループと比較することができる。各グループでは配信されたスライド、他グループの画像を見ながら、その出来具合を確認し、日本語で反省をする。教師は iPad を使ってすべてのブレイクアウトルームに参加して、すべてのグループ活動や反省の様子を常時監視しているので、特定のモノや細部について英語表現が分からなかった場合には、LINE でアドバイスを配信する。例えば、学生たちは、「2重丸って本当はなんていうんだろうね？」と Zoom のブレイクアウトルームで話していることがある。教師は、「Two circles like a donut」、「a double circle, or, a big circle and a small circle in the big circle」など様々な表現があることを LINE で知らせる。学生たちはその LINE を見ながら、「あーなるほどね。ドーナッツみたいって言えばいいのか」と学んでいく。こうして、スライドの伝達、画像提出（結果共有）、反省という流れで1枚のスライドの演習のすべてが終わり、新たなスライドが配信される、という形で遠隔『9マス英会話』は進められていく。

1つのスライドの配信から反省会までに要する時間は、毎回7-8分程度である。レッスンが進むごとにスライドの複雑性や難易度は上がっていくが、学生たちの伝達する力、聞き取る力、確認する力、描画する力は毎回向上するので、1つのスライドに要する時間は毎回ほとんど変わらないまま前期ないし後期に展開される12回分のレッスンが終わることになる。

4. 学生アンケートに見る『9マス英会話』への取り組み姿勢

著者の勤務する大学では、『授業改善アンケート』という学生による授業評価を導入している。各科目の授業の3分の2が終了した頃を実施され、学生は1)出席状況、2)シラバス合致度、3)積極度、4)理解度、5)関心度、6)学習時間、7)教員の姿勢について匿名で評価をする。ここでは、「この科目の授業に積極的に臨めていますか?」という質問で問われた3)の積極度、「この科目の授業内容に興味・関心を持っていますか?」という質問で問われた4)の関心度の結果を示す。

表3.『9マス英会話』を実施した3つの授業の積極度

この科目の授業に積極的に臨めていますか?	英語コミュニケーション I N=15	コミュニケーション・ストラテジーA N=20	ビジネス・コミュニケーション N=11
そう思う	12	12	7
ややそう思う	3	8	4
あまりそう思わない	0	0	0
そう思わない	0	0	0
回答なし	0	0	0

表4.『9マス英会話』を実施した3つの授業の関心度

この科目の授業内容に興味・関心を持っていますか?	英語コミュニケーション I N=15	コミュニケーション・ストラテジーA N=20	ビジネス・コミュニケーション N=11
そう思う	12	12	10
ややそう思う	3	8	0
あまりそう思わない	0	0	1
そう思わない	0	0	0
回答なし	0	0	0

3つの授業では、共通して『9マス英会話』を90分授業のうち30分だけ実施したが、残る60分については、全く異なる授業内容であった。「英語コミュニケーション I」では、事前にスピーチ内容を準備した上でグループごとに「3分間スピーチ」をしてディスカッションをした。「コミュニケーション・ストラテジーA」では、教科書を利用したリスニングの学習、「思い出の写真を英語で説明して描写」、などの活動を行った。「ビジネス・コミュニケーション

ョン」では、企業の営業担当として商品を売り込むプレゼン・交渉を取り扱った。このような差異はあるものの、どの授業においても、学生たちは全員が積極的に参加し、関心度も「ビジネス・コミュニケーション」の1名が関心度について「あまりそう思わない」を選択したことを除けば全員が関心を寄せた結果であった。

授業についての感想や意見など自由回答については、以下のようなコメントが寄せられた（句読点や誤字脱字も含めて原文のまま掲載している）。

表5. 『9マス英会話』を実施した3つの授業の自由回答

英語コミュニケーション I
授業がわかりやすい
グループなのでやりやすいです。
遠隔でもコミュニケーションが取れるのでいい
Zoomでもしっかりと皆んなで話し合えたりして、やり易いです。
英語が苦手で嫌い意識がありましたが、この授業は楽しく受けれて、全然苦痛でないので嬉しいです。
コロナの中で人と話せる授業は少ないのでとてもありがたい。授業もわかりやすいのでとても楽しいです。
コミュニケーション・ストラテジーA
本質を学べるので大変面白いです
オンラインにとっても強くなった気がする。
zoomでも会話しやすい空気が良かった。
英語を積極的に話す機会が出来て良かったです。
オンラインを活用しており、とても良いと思います。
他の人とのコミュニケーションが取れるので楽しいです。
斬新な授業の方法でとても楽しみながら受けることができています。
写真共有や9マス会話が自分で積極的に英語で話せるように促してくれます。
必然的に考えなければいけないので、やったことがそのまま身につくやすすくて良い。
皆んなで話し合っって答えを導き出そうとする点は、楽しいし理解しやすいので良いと思った。
より実践的な英語学習で、英語を話すことを苦手では無くすような授業でとても面白く良いと思います。
グループワークをすることによって生徒自身で考えて発言しながら授業に参加する制度はとても良いと思います。
英語が身につくような授業内容でとてもためになります。グループワークもあるので、わからないところを聞き合えるのがありがたいです。

グループワークがとても楽しい、みんなに迷惑をかけられないというプレッシャーもあったが、今は失敗してもいい空気感があって積極的に参加しやすい
学校に行くのが厳しい中オンラインという形でとてもいい授業を受けることができた。グループを固定にすることで参加しやすい環境が作られていた。また、失敗してもいいという雰囲気が自分にはとてもうれしい。課題のフィードバックもしっかりとされていてありがたい。
ビジネス・コミュニケーション
すごいリアルで楽しいです。
全てにおいて実践的で先進的だなと思います。
他の科目では勉強出来ないようなことを学べるので、楽しいです。
実際のビジネスの現場に近い状態で学べてるのでとてもためになっています。
オンラインでやることで、リアルな海外との商談を体験できている点が良いと思う。
9マス英会話も面白いし、指示が明確なのでとても勉強がしやすいです。オンライン化で凄く良い授業になっていて、履修していて良かったです。

これらの自由回答からは、遠隔化においてもグループ学習を導入することで、楽しさや学びの雰囲気が醸成されている様子が分かる。Zoomのブレイクアウトルームを利用したグループ学習は、すべてのグループを監視する教師側の負担はあるが、学生たちには非常に好評であることが分かる。また、『9マス英会話』は授業の冒頭の30分で利用したが、そこでは間違っても相手に伝わればよい、確認修正していけばよいという雰囲気が作られていたので、その後の活動においても積極的に臨む要因になったようである。

5. 対面『9マス英会話』と遠隔『9マス英会話』の類似点と相違点

『9マス英会話』は、対面の授業を前提に開発されたものではあるが、2020年度は完全遠隔で実施したところ様々なメリット・デメリットが観察された。

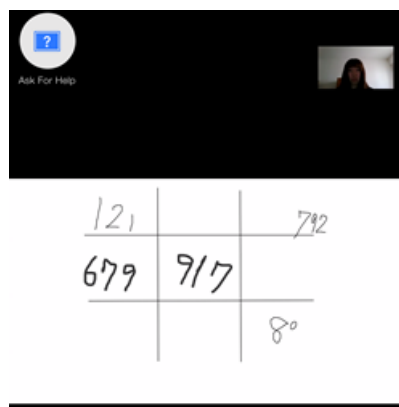
教材であるスライドの提示方法については、対面では、教室内のスクリーンなどに一斉表示するか(『伝達者』がスクリーンに対面し、『記述者』はスクリーンに背を向けて座ることになる)、あるいは、LINEを使って『伝達者』たちに配信するかを選択することができたが、Zoomによる遠隔『9マス英会話』の場合は、LINEでの一斉配信となる。

『伝達者』の指示は、対面と遠隔では、大きな違いが生じた。対面では教室内で行われるため、近くのグループで行われているやりとりが聞こえてしまい、他グループの英語表現を参考にすることができた。このため、必ずしも、自分でどのように英語表現するか考えなくてもよいという場面が多々あった。しかし、遠隔『9マス英会話』では、他グループの音声は一切聞こえない。『伝達者』の指示は、伝達者自身がひたすら考えながら英語表現する必

要が出てくる。他グループの真似をしたり、英語表現を暗記するのではなく、表現の仕方を手持ちの語彙で創意工夫するのがこの『9マス英会話』の重要点の1つであるので、これは遠隔の状況の方が上手くいくことが判明した。

『伝達者』の指示を聞く『記述者』の様子に関しては、対面では、お互いのやりとりを間近に見るので、伝わったか、伝わらないかについては、相手の表情などを手掛かりにすることができる。一方、遠隔の場合は、図5. が示す通り、Zoomの画面のほとんどは共有されているホワイトボードに占有されるので、伝達者の指示は、専ら音声言語に頼ることになる。図5. の右上のように、小窓で相手の顔を表示することはできるが、学生たちの様子を見ると、この小窓を活用しているというよりも、音声言語にのみ頼ったやりとりを繰り返し広げていた。間違いを指摘する No, no, no. 適格性を伝える Yes, yes, yes, 『伝達者』に確認する OK? 、記述者に伝える OK, OK という発話が対面に比べて遠隔の方がかなり頻繁に聞こえてくる。

図5. ホワイトボードを共有している際の Zoom 画面



『記述者』は指示内容を9マスに記入していくが、対面では配布された9マスの線が引かれた用紙に記述していく。ほとんどの学生が鉛筆やシャープペンシルを使用するのでかなり細かな描写が可能となるメリットがある。その一方で、色分けなどは難しいし、書いたものを消すのに手間がかかるということがある。一方、遠隔の場合は、マウスや手で描画するのがほとんどなので、細かな描写が難しい場合がある。しかし、丸や四角などホワイトボードにある図形だと一瞬で描ける。また、機種による差異があるものの、簡単に色付けをすることができる。修正は「戻す」あるいは「消しゴム」を使ってかなり迅速にすることができる。このように描画の際はかなり異なることが分かった。

スライドの伝達終了後の結果については、LINEが稼働していると、各グループの完成したものをスクリーンショット、あるいは画面撮影をすることで、クラス内全体で共有するのが簡単というメリットもある。また、LINEに結果をアップさせることで、どのグループが

最初に終えたかどうかの確認が簡単になる。

以上の相違点と類似点をまとめると

表 6. 『9 マス英会話』の対面授業と遠隔授業の類似点と相違点

		対面授業	遠隔授業
1.	スライド提示方法	教室スクリーン提示 LINE 配信	LINE 配信
2.	伝達者指示	直接対話 ⇒他グループの音声聞こえる ⇒顔の表情が手掛かりとなる	Zoom での対話 ⇒他グループの音声聞こえない ⇒音声言語のみの伝達
3.	9 マスシート	9 マスが描かれた用紙 ⇒細かな描写を手書きできるが、色表現が限定的	Zoom のホワイトボード ⇒細かな描写にスキルが必要だが、色表現が簡単、消去や訂正が容易
4.	結果共有	グループ内で紙を共有し、スクリーンか LINE でスライドと確認	Zoom のホワイトボードと LINE のスライドで確認。

1. のスライド提示方法、そして、4. の結果共有については、対面も遠隔も大きな違いはないと言える。3. の 9 マスシートに関しては、双方にメリットとデメリットがある。大きな違いは、2. の伝達者指示の部分である。言語トレーニングを考えた場合は、遠隔の方が、伝達者がモノの英語表現を一人で考える、記述者が丁寧に確認を求める、という点で言語スキルを大きく鍛えることが可能となる。

5. 遠隔『9 マス英会話』の総括

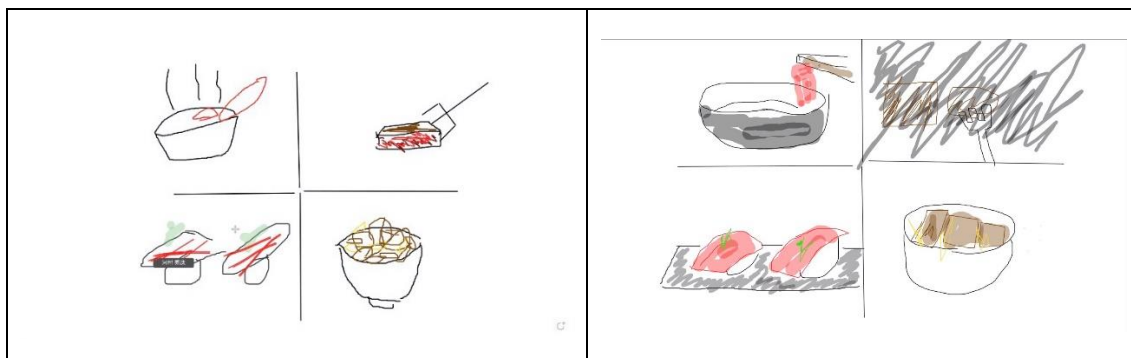
本稿では、2020 年度に突如遠隔授業で実施することになった英会話関連授業において使用された『9 マス英会話』という即時レスポンス能力を向上させる教材の実践報告をした。セクション 2 で記したようなシステムの導入と教師の側の操作の煩雑さを除外すれば、『9 マス英会話』は遠隔においても十分に使用することが可能で、純粋に英語表現力を培う上では、総じて対面よりも遠隔の方が優れていた。残念ながら、COVID-19 による混乱で授業確保の関係からこの授業に参加した学生の調査研究は実施することができず、発話語数の推移などを測定することはできなかった。2015 年から毎年『9 マス英会話』を利用している教師の経験から得た観察では、例年に比べて、モノの描写が細部に行き届いていただけでなく、描画を完成させるスピードが非常に速かった。

遠隔『9 マス英会話』の場合、LINE と Zoom を同時に並行で利用するため、『9 マス英会話』開始当初の学生間の IT リテラシーには大きな差があり、戸惑う学生が確かに存在する。

しかし、学生たちは「それってどうすればいいの？」と結果共有の時間に操作上の情報交換もして行くので、その差は数回のレッスンで縮まる。また、『9マス英会話』では、やり方に慣れるまでの4－5回のレッスンはグループ内のメンバーを固定して互いのレベル向上を図るが、その後は、毎回グループメンバーをシャフルしているのので、各グループで培った操作方法や伝達ストラテジーはクラス全体に共有され、その能力差は平準化することとなり、レッスンを終えるころには、表7. で示したように、スライドの提示から結果提出までの時間はグループ間の差がほとんどなくなる。

表7. 『9マス英会話』の最終レッスンにおける提示スライドと学生の描画スライド

提示のスライド
商品名や企業名を言うのは禁止 
4つのグループの学生が描画したスライド

以上のように、遠隔『9マス英会話』は対面『9マス英会話』よりも効果が高いとの経験的な結果が得られたが、今後の課題としては、その効果の差異の科学的検証が必要となる。そして、対面下と遠隔下の両方において、場合によっては、そのハイブリット環境において有効な教材の活用方法を確立することである。

謝辞

本実践報告については、匿名査読者から非常に有益な助言をいただき、その助言に基づいて加筆修正することで論旨が明確になった。年度末のお忙しい中、懇切丁寧なレビューをしてくださった先生方にこの場を借りて御礼申し上げる。

参考文献

- Bao, Dat (2013) "Developing Materials for Speaking Skills," in Tomlinson, B eds. *Developing Materials for Language Teaching*, pp.407-428.
- Bygate, M. (1987), *Speaking*. Oxford: Oxford University Press.
- Graves, Kathleen (2019) "Recent books on Language Materials Development and Analysis," *ELT J*, Volume 73, Issue 3, pp. 337-354.
- Naito, H. and Terauchi, H. (2020) "English for Business Purposes (EBP)", *Towards a New Paradigm for English Language Teaching - English for Specific Purposes in Asia and Beyond*, pp.181-192, London: Routledge.
- Tay, M. W. J. (1988), 'Teaching spoken English in the non-native context: considerations for the material writer', in B. K. Das (ed.), *Materials for Language Learning and Teaching. Anthology Series 22*. Singapore: SEAMEO Regional Language Centre, pp. 30-40.
- Tomlinson, B. (ed.) (2011), *Materials Development in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 石川希美・山田政樹 (2019) 「実践的インタラクション・タスクの取り組み：スピーキング能力の養成を目指して」, 『札幌大谷大学札幌大谷大学短期大学部紀要』, 49, 73-82

- 柴田晶子（2015）「商談会通訳者へのアンケート結果から探る大学英語教育への示唆」『ESP 北海道 journal』3, 8-20
- 内藤永（2015a）「「中小企業の海外展開を担うグローバルビジネス人材の育成モデル構築」研究報告書」、『平成 26 年度札幌市大学提案型共同研授業』
- 内藤永（2015b）『産業界の英語ニーズ調査に基づく人材育成モデル』、東北大学大学院博士学位論文、東北大学 <<http://hdl.handle.net/10097/60717>>（アクセス日：2021 年 2 月 28 日）
- 内藤永（To appear）「即時レスポンス能力を向上させるスピーキング教材『9 マス英会話』の開発」、『金子義明教授退官記念論集』開拓社
- 文部科学省（2020a）『大学における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果』、文部科学省、https://www.mext.go.jp/content/20200915_mxt_kouhou01-000004520_1.pdf より
- 文部科学省（2020b）「大学・高専における遠隔授業の環境構築の加速による学修機会の確保～文部科学省高等教育局の対応状況～」、『4 月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム「データダイエット戦略」』、国立情報学研究所主催『教育機関 DX シンポ』、https://www.nii.ac.jp/news/upload/20200403-1_Mext.pdf より
- 山田政樹・石川希美・坂部俊行・内藤永（2021）「実践的インタラクシオンタスクトレーニングがスピーキング能力へ与える影響－発話量の変化から見る 9 マス英会話トレーニングの有用性」、ESP Hokkaido Journal, Vol.4